王位継承戦

作＝グレイス

1

ゴール帝国が誇る七百年の歴史の中で、どれほどまでの血を吸ったか知れぬ闘技場の石畳みを踏みしめ、ゲイルは、楽も苦も共に過ごしてきた妹と、向かい合っていた。

ゴール帝国は武を重んじる国である。皇帝の座につく者は、帝国で一番強くなくてはならない。

そして今、十八の若さで父を決闘で葬り若き皇帝となったゲイルが、十七の誕生日を迎えた妹、サーラの兆戦を受けようとしている。

二メートルを僅かに超える身長をまさに鍛えぬかれた筋肉で覆うゲイルは、サムソン皇帝の生き写しと言われる程の体躯であった。

ゲイルは、厚い麻生地の腰巻一枚という姿で、褐色にやけた肌を晒していた。首は猪か牡牛のように太く、ゲイルが肩を慣らすたび、幾重にも重なった大蛇のような筋肉がその中でうねった。

その首が埋まる程に盛り上がった肩、これ以上は無いというほど分厚い胸板、いくつにも分かれた瘤のような腹、それらの全てを鋼鉄の筋肉が覆っていたが、その表面には薄らとした脂肪が張られ、それが無理に作られた肉体ではなく、恐ろしく実戦的な筋肉であることを証明していた。

妹のサーラを見下ろすその顔は、いかつい四角い顎を短く切り揃えられた髭が囲う、一見は強面であった。
その瞳は普段は好奇心に溢れる少年らしいともいっていいほどの輝きであるのだが、流石に、この世継ぎを決める決闘の前にあっては、まるで獲物を狙う獅子のごとき鋭さであった。

一方、大きく胸を反らして立つ妹のサーラの身長は、それでも兄の胸の中ほどまでしかなかった。
今日、十七の誕生日を迎えたサーラは、肩まで伸ばした艶やかな黒髪と、これまたゴール皇族の女性特有である早熟さを示す、見事なプロポーションを誇る美少女であった。
僅かに胸を隠す皮の胸当てと、それと同じ素材の漆黒の腰巻以外何も身につけていない。よく焼けた小麦色の肌と、黒の装いが美しかった。
サーラの四肢は、長くしなやかで、あくまで女性的であったので、戦いの神の生き写しかと見まがうゲイルの前では、恐ろしくか弱く見えたが、闘いを良く知る者が見れば、その四肢全てを、絶え間無い鍛錬を窺わせるしなやかだが強靭な筋肉が覆っていることに気付いただろう。
それでも、サーラが女性的な肉体を保てた理由としては、己の筋力の限界と、体重との全体バランスが考えられた結果でしか無かったのである。
実際、サーラは兄のゲイルと同じくゴール柔術の達人で、兄が北派道場の総師範代であるが故

か、南派道場で主に修練を積み、師範となっている。南派の師範の中では、筆頭にも数えられていたが、兄のゲイルとは公然の場では練習試合であっても一度も見舞えたことはなかった。
それだけに、闘技場を生め尽くす二万の国民は、これからのゴールの支配者を決するこの決闘の予想を立てるのに躍起になっていた。
大方の予想は、やはりゲイルの有利は揺るがないであろうというものだった。事実、体格、体力の差は歴然だったし、経験も八歳年上のゲイルがそれだけ多く積んでいることになる。
むしろ、ゲイルの前では赤子に等しく見えるサーラにとって、有利な情報を見つけることには苦労したのだ。

人々のざわめきの中、闘技場の中央で対峙する二人の皇子と皇女は、ただじっと兄と妹の瞳を見つめていた。
お互いに、仲の良かった過去を思い返しており、これからの覇権を巡っての闘いに、相手がどのような感情を抱いているのかを、見透かそうと必死であった。
だが、そのような二人の思惑をよそに、決闘の開始を告げる鐘が、一つ鳴らされその余韻が闘技場を充たした時、恐ろしいまでの静寂が訪れた。
その中を、無常にも二つ目の鐘の音が響き渡る。
そして、最後の鐘の音が聞こえるが否や、闘技場は爆発するばかりの歓声に包まれた。

それは、地響きを伴う国民の熱狂そのものであった。若きも老いも、男も女も身を乗り出してこの兄妹の死闘を、一尾始終見逃すまいと必死であった。

その凄まじい熱気の渦の中で、二人の闘士は冷静にも見えた。

両手を顎と胸の前で握り締め、殆ど正面を向いてどっしりとかまえるゲイルに対し、サーラは左肩を前にした半身で構え、軽やかなステップに身を浮かせていた。サーラは、始めゲイルと向き合う形の半身であったが、時折、背を向ける半身にもなったりした。

だが、すぐまた向き合う形に戻る。

ゲイルが、前足をじりっと前に出せば、サーラは同じ距離を軽やかに下がり、サーラが前に出れば、ゲイルがじりっと下がる。

隙を伺う二人の間に、ビリビリと張り詰めた空気のみが漂い、傍観者達の興奮を煽った。

一見、動きの無い間合いの取りあいだったが、この駆け引きこそが序盤の流れを決定付けるものであることを熟知していた二人は、決してうかつに動かなかった。

その均衡のまま、十分ほどの時が流れただろうか。

その時、動きがあった。

先に仕掛けたのはサーラだった。

サーラの白い左脚が残像を生むほどに素早くしなり、ゲイルの右足にぶち当たった。

かっ、という何か硬い物に当たったような音がした。

ゲイルがインパクトの瞬間に筋肉を硬直させ、全てのダメージを弾いた音だった。

「しゅっ！」

間髪を入れず、サーラの唇から空気が洩れると同時に、同じ蹴り脚でのハイキック。

しかし、ゲイルの右手のガードに阻まれる。

右手の掌打が、ゲイルのだんご鼻を狙って直線を描く。

ゲイルはそれを避けも受けもせず、額で受けた。

次の刹那、サーラの左の肘が空気を切る恐るべき早さでゲイルの四角い顎を狙った。

ゲイルの右のガードがそれを受け止める。

もし、右掌打のフェイントにゲイルがかかっていたら、極めて有効な一撃になっていたかもしれぬ。

左のロー、右足の突き蹴り、左の掌打の三連打…。

サーラは止まらない。

武道を一筋に経験した者達が、感嘆の声を洩らす。

いかに屈強な闘士であろうとも、これほど攻めつづけたら、息の一つも乱すものだ。

だが、サーラはその卓越したバネと運動センス、そして呼吸法の鍛錬のおかげで、苦も無く攻撃を続けることができたのだ。

人々は、防戦一方で次第に後ずさるゲイルと、その前で踊るように攻撃を繰り出し続けるサーラの姿を見て、己の予測が浅はか過ぎたこと思い始めていた。
実際、ゲイルとサーラは一度も闘ったことが無かったし、その見かけからしか勝敗を予想する材料は無かったのだ。
だが、サーラにも当然限界はあった。
蹴り足を取られてバランスを失うことのないよう、腰から上への蹴りは殆ど放たなかったし、ここぞという攻撃はゲイルの目、鼻、喉、そして股間と、筋肉の鎧が守らぬ急所ばかりを狙っていた。
しかし、サーラの思った通り、兄の防御は完璧であり、数発ガードを抜けてヒットさせたものの、いずれも急所を捉えることは出来なかった。
これでは、逞しい巨躯を誇る兄にダメージを与えることはできない。
焦りからか、息の乱れを意識したサーラは、一度距離を離すためにゲイルのガードを予測し、それを押すようにして身を引くための前蹴りを放った。
その時である。
予想通り、ゲイルの丸太のような左腕がサーラの右足での前蹴りをガードしたのだが、その左腕が勢い良く振られ、妹の蹴り足を激しく弾いたのだ。
「あっ」

サーラは、軸足が僅かにぶれるのを感じた。
ゲイルの巨躯が、初めて前に出た。
大きな踏み込みと同時に、右の掌打でサーラの胴を狙う。
サーラはゲイルの拳風に吹かれたように後ろへ引く。
それを予想していたかのように、それほど掌打に力を込めようともせず、ゲイルの巨体がさらに押し寄せた。
（ガード！）
ゲイルが恐ろしく筋肉を盛り上がらせた右腕を振りかぶるのが見えたサーラは、両腕での上段ガードを固めた。
ゴッ。
鈍い音がした。
ガードごと、サーラの重心が左に大きく振られた。
重い。重すぎる一撃だった。
まるで、鉄の槌で殴られたような衝撃だった。
これではガードしても、意味がないと思った途端、全身に冷水をかけられたような恐怖感がサーラを襲った。

後ろに下がる間もなく、サーラは殆ど困惑しながらゲイルの攻撃を必死に見ようとした。
左のローキック。
その目と良さ読みの良さこそが、サーラを支える唯一の命綱だった。
サーラは左の膝を曲げ、ゲイルのローキックを根元で受けてダメージを押さえようとした。
しかし、この防御もゲイルの剛力の前では意味をなさなかった。
予定通り、ゲイルの左膝あたりをヒットポイントにしたのだが、まるでまともなローキックを受けた時のように、サーラの体勢はまたしても大きく崩れた。
軸にした右膝からの激痛が脳に届かぬうちに、サーラは再び両腕で頭を守らねばならなかった。
ゲイルの左パンチが唸りを上げていたのだ。まともにくらったら、一巻の終わりであることは疑いようもなかった。
観衆のボルテージは既に最骨頂を迎えていた。
ただ一人、サーラだけにはその歓声も聞こえない。ガードを突きぬけてくるゲイルの攻撃に、サーラは丸まりながら耐えるしかなかった。少しでもガードの手を緩めれば、ゲイルは瞬時に闘いを終えるだろう。
その必死のガードさえ無意味かと思われる攻撃を受け続け、サーラは既に額から流血していた。
上から振り下ろされたゲイルの拳が、サーラの頭の中に火花を散らせる。
（ああ…倒れよう）

あまりの苦痛、あまりの絶望に、サーラは降参を意識しかけた。
だが…
一瞬、ゲイルの砲弾のような攻撃に間隔が空いた。
サーラは、既に痣だらけの両腕と波打つような頭痛を逆に意識したが、ほぼ反射的にフェイントである左の掌打からの金的蹴りの連続攻撃を放っていた。
左の掌打がゲイルの頬骨に当たる感触。
右足の渾身の金的蹴りは、ゲイルの交差受けでがっちりと防がれていた。

サーラははっとした。
ゲイルの攻撃が止まっている。
ただ一発のサーラの蹴りに、ゲイルは完全な優勢からの防御を強いられていた。
そのサーラの蹴りは、ゲイルの股間、つまり睾丸を狙った蹴りであった。
サーラは、唯一の優位性に改めて気付いた。
自分は兄よりも急所が一つ少なく、しかも兄しか持たない急所は決定的であることだ。
防御に回ったゲイルの薄く大きな唇が、への字に曲がった。
嫌がっている。
サーラは思わずほくそえんだ。

サーラは、道場で屈強な対戦相手の金的を蹴り上げて悶絶させるたび、神様は男と女を上手に作り分けたものだと思った。

女性はどうしても筋力や体格で男性に劣るが、男性は股間にぶら下がる睾丸というこの上ない弱点を持っている。非力な少女でさえ、相手の睾丸を蹴ることができれば、それがどんなに鍛えぬかれた肉体を持つ大男でも、地に這わすことが出きるのだ。

それは、武王の再来と謳われる目の前の逞しき兄とて、逃れられない男としての宿命であった。

だが、その思いが兄の股間へ注がれる視線となって表に現れ、ゲイルに読み取られていようとは、危機的状況にあったサーラが気付くはずもなかった。

サーラは、それでも慎重にローキックと肘打ちのフェイントを混ぜ、単純には金的を狙わなかったのだが、最終的に放った金的への蹴りを見事に掬われていた。

サーラの蹴り足である左脚の下に、ゲイルのご太い右腕が滑りこみ、サーラの身体はたちまち持ち上げられていた。

ゲイルは胸にサーラを抱く体勢から、彼女を完全に軽々と抱え上げようとした。

そうなってしまっては、硬い石の床に叩き付けられて、一撃で終わりである。打ち所が悪ければ、死ぬかもしれない。

声も出ぬほどの恐怖を伴う浮遊感の中、サーラは必死に身体を捻った。

サーラのしなやかな肉体が、人の手から逃げる魚のようにうねる。

しかし、ゲイルとてもこの好機を逃すわけにはいかぬ。抱え上げるまでの間に逃げられては元も子もない。

咄嗟にその巨躯を反らせ、胸に抱え込んだサーラをそのまま地面に叩きつけた。

「ぐうっっ！」

ゲイルの身体の下で、サーラが苦痛に叫んだ。

かろうじて頭からの落下は避けたものの、肩口から激しく地面に叩き付けられ、肺からは全ての空気が搾り出され、肋骨にもひびが入ったような鋭い痛みが走り、背骨は激しくきしんで悲鳴を上げた。

サーラは、殆ど無我夢中で上下も分からずに転がった。とにかくゲイルの追撃から逃げなければならなかった。万が一にも、もう一度投げられたら二度と立てないという確信もあったし、何よりも兄の怪力が恐ろしかったのだ。

ようやく膝をついたサーラは、がっちりと固めたガードの隙間から、追撃に来る兄を見た。

ゲイルはまるで迫り来る牡牛のように、この上なく逞しかった。

丸い岩のような瘤を盛り上がらせた二の腕には、太い血管が浮き出ていた。その付け根の肩は、鋼鉄の肩当のようにごつく、太い首が埋まるような肩の筋肉が二つの山のように見えた。その下には分厚い胸の筋肉があり、胴はあくまで樫の木のように太く、揺るぎ無い重量感を持っていた。

その前で、サーラの華奢な身体は怯えるように縮こまっていた。
既に、サーラの両腕は自分の流血で紅く染まり、その燃えるような赤毛も血で額にこびりついていた。
死刑執行人のごとく歩み寄る兄の様子を、サーラは丸まってじっと見ていた。
うかつにも、ゲイルが丸まった妹に蹴りを放ったならば、妹はその蹴り足にかじりついてでも放さなかっただろう。そうすれば、あるいはサーラにチャンスもあったかもしれない。
だが、ゲイルは歴戦の闘士だった。
ちょっと前に出した足はフェイントで、それに浮き足立ったサーラの白い腹に、岩の拳が叩きかまれていた。
「げぼおおっっ！」
サーラは宙に浮かされながら、吐いた。
腹の中の全ての物が一撃で逆流し、胃そのものまでもが喉まで叩き出されたかと思った。
サーラが地に足をつけることが出来たとき、吐くものがなくて涙が出た。
それでも、サーラはゲイルの攻撃を見ていた。
顔面に向かって唸りをあげる右の拳。
サーラはガードを固めた。
しかし、激痛は再び腹から訪れた。

ゲイルが蹴り上げたのだ。
サーラの身体は再び宙に浮かされた。
サーラの口からは、今度は血しか出てこなかった。
小さなピンク色の唇を、噴出された血が染め、地面の石をも激しく紅く染め上げた。
サーラは、涙でかすむ目で、正面を見据えた。
そこに、兄の巨大な拳が迫っていた。

みしゃあっ。
鼻の軟骨が砕ける音を残し、サーラの身体は縦にくるりと一回転しながら、真後ろに吹き飛んでいた。
ゲイルの右の拳から、きりもみしながら吹き飛ぶサーラに向かって、一筋の紅い血の道が引かれていた。
（あ……）
「痛み」を超えた激痛の中、意識を失わなかったのは奇跡ともいえた。
ゲイルの一撃で、鼻と左のほほ骨の一部を粉砕されながら、サーラはようやく、木製の人形のように地面に転がった。
（ああ……）

サーラの脳裏には、ゲイルの決め技、サムソン・スープレックスの体勢で抱え上げられた父の最後の姿が浮かんでいた。
息子の逞しい肩の上で、父は逆さに抱え上げられていた。
その顔と首はゲイルの肩の筋肉に埋もれ、かつては息子のそれのように逞しかった両脚は、息子の両手で情けなく広げられる形で固定されていた。
首、両肩、股関節。その全てをがっちりと極めたまま、ゲイルの巨躯が宙に舞う。
ゲイル程の怪力がないと成し得ぬこの技は、まさに必殺技だった。
それだけに、かの武王の名を冠するこの大技は、代々ゴール皇族の男たちの中でも、限られた者しか放つことができなかったのである。この技を完成し得なかった父は、この技で息子に敗れ、皇帝の座を明渡したのだ。
再び、サーラが意識を過去から現実に引き戻した時、彼女は兄の肩の上という、死刑台の上にいた。
サーラは必死になってもがいた。
無駄だった。既にがっちりと極められている。
全身のあちこちが、まるで冗談のように痛む。
「妹よ。言い残すことは？」
哀れみの中の悲しみを押し殺したような、兄の声がその大きな肉体を伝ってサーラの耳に届いた。

「まだ…勝負は…決まってない…」
サーラの声は、ゲイルの肩の筋肉に埋もれてくぐもった。
「……」
ゲイルは答えなかった。
(兄さん…。ゲイル兄さん。父上を殺したこの技で、私も殺すのね)
(はじめから、わかっていた。私なんかが兄さんに勝てるはずもないこと)
それでも、サーラは闘わなくてはならなかった。ゴール皇族の女闘士として、女帝の可能性がある限り、闘わずしての敗北はありえなかった。
そして、サーラ自身もまた、勝てはしなくとも、地上最強の男と謳われる兄と闘い、どこまでやれるかを試してみたかったのだ。
だが、その兄と妹による孤高の闘いも、終わりを告げようとしていた。
「むんっ」
ゲイルが跳躍した。

2

サーラは、死に向かっての最後の浮遊感をぼんやり感じていた。
それは、実際よりも遥かに長い時間のように感じられた。
（兄さん…）
兄の汗ばんだ暖かい筋肉に埋もれ、サーラは心地よい最後を迎えられそうであった。
しかし、落下の最中、不意に全身を開放感が襲った。サーラは、深い深い死の闇から、一瞬にして覚醒した。
生への望みが、サーラの肩とゲイルの肩との間に生まれていた。
サムソン・スープレックスには、思わぬ抜け道が存在していた。
更なるダメージを与えるため、二人が落下するタイミングで僅かに両腕による束縛を上方に緩め、着地の瞬間、その衝撃と技を受ける側の体重、そして攻撃側の再度の締め上げによって相手を粉砕する。
元々、サムソン・スープレックスは、屈強な相手を粉砕するために編み出された必殺の技だ。その過程において、例えばゲイルとその父トウランとの闘いのように、防御側と攻撃側の体格にさほどの格差がなければ、技が解けることなどありえない。
しかし、今回の受け手は、ゲイルの胸の下までしか上背がない、しかも女性のサーラであった。ダメージを増すための動作が、皮肉にもサーラを逃がす手助けをしてしまったのだ。
不意に、サーラの首がゲイルの背中にするりと抜けた。

たちまち全ての束縛が無意味となり、空中で、サーラの身体はするりとゲイルの背後に滑り出た。
「なっ…」
わぁっっ！
会場全体がはっと息を呑んだようだった。
ゲイルがどしんと地面を揺らして着地したとき、その足元でサーラが両手をついていた。そして、ゲイルは一瞬だが唖然としていた。
サーラに躊躇はなかった。
サーラのしなやかな脚が、バネ仕掛けの器具のように風を切って振り上げられ、その足首から先がすっとゲイルの腰布の中に滑り込んだ。
薄い皮の靴越しに、サーラのつま先に柔らかい感触があった。
ゲイルが微かに苦痛のうめき声を上げた。
尻の側から睾丸を蹴られたゲイルは、下腹部から沸きあがる息が詰まるような痛みに耐えながら振りかえった。
まだ地面に寝そべっているサーラを正面に見れば、有利は揺るがない。思いっきり踏み付けるか蹴飛ばすか、あるいは組み伏せるか。いずれにしろ、決着はつくはずだった。

しかし、この体勢はゲイルが予想していたよりも遥かに自分にとって危険なポジションであることに、次の刹那には思い知らされていた。
振りかえったゲイルの目に入ったのは、両膝をついた状態のサーラだった。丁度、ゲイルの股間の位置にサーラの頭があった。
サーラは、鋭いショートアッパーを放っていた。そのターゲットは、振りかえったばかりのゲイルの股間であった。
一瞬、サーラは自分の拳に暖かく柔らかい物の感触を感じると、そのままそれを上方に打ち上げるようにして拳を振りぬいた。
ゲイルの睾丸に、サーラのアッパーがまともに決まった。
「はがああああっっおお！！」
ゲイルの口から、信じられない程の絶叫がほとばしった。
ゲイルらしい低い声だったが、それは会場中に絶え間無く響きわたった。
激しい吐き気を伴う激痛に襲われたゲイルは、瞬間、全ての感情と全ての動きを失っていた。ただただ耐え難い激痛に前かがみになり、両手は無意識に股間へと走った。
睾丸を守らなくては危険だと、ただ思った。

サーラは、確実にチャンスを掴んでいた。

咄嗟に、ゲイルの腰布を掴み、剥ぎ取った。
臍の周りまである濃い陰毛の中に、その体躯に見合った、大蛇のように大きな、特に太さが目立つ陰茎が目に飛び込んできた。
ゲイルの大きな両手が、その後ろで揺れる、片方がサーラの握り拳よりも大きい睾丸を、慌てるようにして包み込んだ。
サーラはすっくと立ちあがった。
目の前には、筋肉の塊とも言うべく逞しい兄が、股間を両手で押さえ、前かがみになり、顔面を無防備にも突き出す格好でいた。
ゲイルの苦痛に歪む太い眉を見たのは、しかし一瞬だった。サーラの渾身の蹴りが、ゲイルの顔面にめり込んでいた。
持ち前のバネを生かし、腰の捻りを十分に効かせた蹴りだったが、さすがにゲイルは僅かに揺らいだだけだった。
続けざまに、サーラの天を突くような蹴り上げが、ゲイルの顎に炸裂した。
「がはっ」
強制的に上を向かされたゲイルの口から、紅い唾液が吹き上がった。
「はっ！」
満身創痍であったはずのサーラだが、溢れ出すアドレナリンで、全身の痛みはまったくと言っ

ていいほど、感じられなかった。
ただ、砕かれた鼻と頬骨の一部に痛みを感じたが、このチャンスを逃してはいけないという思いが、痛覚を麻痺させていた。
身体を一回転させた回し蹴りが、ゲイルの顔面を横になぎ払う。血と唾液が、今度は横に飛ぶ。
それでもまだ、ゲイルの大きな両手はしっかりと自分の股間を握り締めていた。
「やややややっ！！」
サーラの甲高い掛け声が、戦姫の思わぬ反撃に沸く会場の歓声に混じった。
文字通り、目にもとまらぬ素早い連続掌打が、ゲイルの大きな鼻に正面から容赦無く叩き込まれていた。ゲイルは両目を閉じて、これに耐えるしかないようだった。合わせて十二の発の掌打が、全てゲイルの鼻に決まった。
サーラがおもむろに、腰を捻って掌打を後ろに引いた。
その間に、ゲイルがようやく股間から両手をはなして、ガードを上に上げようとしていた。
「やっ！！」
渾身の掌打が、ゲイルの太い両腕のガードをすり抜けてゲイルの鼻に炸裂し、その軟骨を砕いて頬骨へと押し込んだ。
ぶっ。

ゲイルは鼻から勢い良く出血した。
ゲイルは、困惑していた。
勝利を確信したのは、つい先ほどの筈だった。だが、今は攻守が完全に入れ替わっている。顔面に広がる痛みがそれを教えていた。
正直、サーラがここまで自分を苦しめるとは考えてもいなかった。だが、サーラに蹴られ、殴られた睾丸の痛みは、いかにゲイルが無双の闘士といえど、いかんともしがたかった。
無論、ゲイルは己の肉体と技を磨くための鍛錬を、何よりも大事にする男だったので、これまで何回かは急所攻撃をくらったことはあったが、そこに会心のアッパーカットを食らったことはなかった。そのダメージの大きさと、腰全体に残る「重さ」という後遺症には、男であるがための弱点を恨まずにいられなかった。
ゲイルは、もはや睾丸にはダメージを食らうまいと心で呟きながら、ようやく反撃に出た。
左から始まる、左右のパンチのコンビネーションだ。
鼻をやられた直後だったためか、自然と溢れた涙のせいで、視界が僅かにぼやけていたが、サーラの姿を捉えることは出来る。
だが、その二発の拳の下を、サーラはガードせずにかいくぐった。
岩のような筋肉の瘤がついた、ご太い腕でのパンチである。当たれば細身のサーラはそれだけ

で倒れかねないパンチであったが、当たらなければただの素振りであるのだと、当然のことではあったけれども、闘技場を埋め尽くす国民は、なんとなくしみじみと思った。
ゲイルにそれほどの自覚はなかったが、サーラにとってみれば、ゲイルの身体のキレは、二度の急所攻撃のおかげでかなり鈍くなっていた。
ゲイルの空振りの隙に、サーラはゲイルの顎目掛けてアッパーを放ったが、ゲイルが首を振ってこれをかわす。
ここで、ゲイルは大きくバックステップをした。
再びゲイルがどっしり構えると、その股間で陰茎と睾丸が大きく揺れた。
サーラも一つ大きく息を整える。

サーラは、緊迫する間合いから離れたことで、改めて自分の痛みに気付いたようだった。
特に顔が痛む。鼻の軟骨は砕け、頬骨まで一部折れているのだ。無理もない。
だが、節々は痛むものの、四肢に支障はないようだった。意識も、いい方向に高ぶっているようで、その目は対峙する兄をしっかり見据えていた。
ゲイルは妹の手により全裸にされていた。目の前の兄は、何もかもが太く逞しく、相変わらずどっしりとした威圧感を放っていたが、その鼻は潰れ、出血が著しかった。それが、自分の仕業である今、当初感じていた恐れは無くなっていた。

兄がいかに優れた格闘家で、強く大きく逞しい男であろうと、同じ人間なのだ。
サーラは、己の身体を無意識のうちに硬くしていた負の意識から、また無意識に抜け出していた。
それを知ってか知らずか、ゲイルが思わぬ早さで先に仕掛けてきた。
巨躯を唸らせるように、一気に間合いを詰める。
左の掌底。サーラの顔面を狙っている。
サーラはこれをかわすが、隙あらば掴もうと試みた。
だが、ゲイルの掌底は完全にフェイントだった。
次の瞬間、体勢を低くしたゲイルが、闘牛のようにタックルを仕掛けてきた。サーラは身を翻し、これをかわそうとしたが、ゲイルの幅広い肩に片足を捕らえられた。
サーラが後ろ向きに倒れ、ゲイルがそれにのしかかろうとする。ゲイルは、打撃戦ではサーラにも自分に付け入る隙があることを悟り、腕力で押さえ込めるグラウンドに持ち込もうとしたのだ。
だが、サーラとてゴール格闘術の達人である。兄にタックルは許したものの、そう簡単にいいポジションは取らせない。
咄嗟に両足を兄の胴に巻き付け、兄との隙間を無くそうと努めた。そうすれば、決定的な上からの打撃を食らわずに済む。

兄の身体に抱きつくようにして、地面との間で揉まれるサーラ。ゲイルはそれを引き剥がし、効果的なパンチを妹の顔面に放とうとするが、迂闊に手を出すと、サーラのしなやかな手が、一瞬にしてその肩や肘を極めてしまいかねない。

そういった悶着状態が、五分ほど続いた。

それほどに、二人のグラウンド能力は切迫していたのだ。

ゲイルは予想以上のサーラの技術に舌を巻いたが、この掴み合いでは、どうしても自分に分があると確信できた。

不意に、ゲイルの両腕が直線的に殴ろうとする動きをやめ、大きくサーラを抱きかかえるように広がった。

サーラは一瞬虚をつかれたが、これはチャンスと、頭突きをゲイルの鼻に叩き込んだ。

ゲイルの潰れた鼻がさらにひしゃげ、止まりかけていた血がまたも噴出したが、ゲイルはかまっていなかった。

サーラがはっとした頃には、完全に抱え上げられていた。

今度は逃がすまいと、ゲイルの両腕は全力でサーラの腰を掴んでいた。そのまま、ゲイルは勢い良くブリッジの体勢に入った！

サーラを抱いたまま後方にしなり、妹の頭を石の床に叩き付けようというのだ。

わああっっ！！

ゲイルの芸術的な身体が、サーラの白い身体を乗せ、美しく弧を描く。

人々は皆、サーラが闘技場の硬い床に脳漿を撒き散らす絵を想像して悲鳴を上げた。

このまま、ゲイルの攻撃が成功すれば、間違い無くそれは現実であっただろう。

だが、サーラは驚くべきしなやかさを見せた。

自分の身体をしっかりと掴んでいるゲイルの太い褐色の腕を中心に、己の身体を思いっきり反らせたのだ。

丁度、兄と妹がお互いに腹を合わせ、外側に身体を反らせた形になる。

ゲイルは異変を感じ、腕を振り上げ、サーラの頭を下にしようとしたが、鍛えぬかれた鋼鉄の筋肉に覆われた体は、白く、しなやかな筋肉を持つ妹のそれほどには、しならせることが出来なかった。

どさりと音を立て、先に背中を地面につけたのはゲイルだった。

その瞬間、サーラは激しく身体をばたつかせて脱出を図ったが、ゲイルがそれを許さなかった。

転がりながらも、ベアハッグの要領でサーラの胴を締め上げる。しばし、二人は砂煙にまみれて地面を転がった。

「くううっ」

ゲイルの怪力が、サーラの腹から、そして肺からと、順に空気を搾り出し、既に内臓までをも

搾り出そうかという勢いだった。
その万力から逃れるため、サーラは苦痛に耐えながら、細い腕を上げた。
万力のような締め上げが、サーラの動きを妨げる。
だが、サーラは遂にその白く細い指をゲイルの右目につきたてた。
「ぐあっ」
ゲイルは目をつぶって防ごうとしたが、サーラの爪の先が瞼をこじ開けて眼球の表面に触れた。
さらに、サーラの指が進入し、ゲイルは激しい異物感に襲われた。
たまらず、両手をはなしてサーラを突き放した。
二人の身体は、別々になり地面を転がった。
両手をつき、片膝になって立ち上がろうとしたタイミングは、ほぼ同時であった。
が、ゲイルの視界はサーラの爪がつけた傷のせいで、一瞬もやがかかったように見えた。ゲイルはそれを取り払おうかとするように、瞼を閉じて顔を振った。
彼が再び目を開けた時、サーラの姿がそこにあった。
サーラの脚が自分の顎に振り上げられていた。
ガコッと音を立て、両腕を地面につけたままのゲイルは、強制的に上を向かされた形になった。
サーラは蹴り上げた脚を地面につけると、間髪を入れずに反対の足で再び蹴り上げた。

「ぐふっ」
唾液と血を撒き散らし、ゲイルはたまらず地面を転がった。サーラから、とりあえず距離を取らないことには、どうしようもなかった。
三回ほど横に転がり、顔面を両腕でガードしながらすぐさま立ち上がる。
ようやく立ち上がれたゲイルは、さらにバックステップで距離を取った。
正面を見ると、ぼやけた視界の中で、サーラが笑っていた。
サーラは、ろくな構えも取らずに、挑発的な微笑みを漂わせながら、兄の目を見つめていた。
その妹の表情を見て、ゲイルの頭の中で何かが弾けた。
それは、肉親に対する最後の思いだったかもしれない。

3

兄妹というには、お互いを傷つけすぎた二人は、もはや、肉親である以上に二人の格闘家であり、お互いを倒すためだけに向かい合っていた。
「うおおおお！！」
雄たけびを上げて、ゲイルが一気に間合いを詰めた。闘いの当初に見せた、腕力で押さえ込む戦法に持ち込もうと、拳を強く握り締めた。

上腕が丸い岩のように盛り上がり、逞しい肩と首との筋肉がさらに容積を増したように見えた。唸りを上げた拳が、サーラの顔面に叩き付けられようとしていた。ガードされてもかまわない。その上からダメージを与えるための攻撃なのだ。

ふと、サーラの姿が消えた。

無論、ゲイルにはそう見えただけなのだが。

実際には、サーラはゲイルの右側に素早くステップしただけだった。

ゲイルの右目は、異常なほどに張れ上がっていた。サーラの鋭い爪が、一瞬のうちにゲイルの右目の眼球に傷を付け、ここまで腫れ上がらせたのだ。

実際の眼球が受けたダメージより、この腫れこそが、ゲイルには致命的だった。腫れた瞼が隠す視界に、サーラは潜り込んだのだ。

目標を失ったゲイルの右パンチが空を切る。

（右か！）

それでも、気配でサーラの位置を把握したゲイルは、正面を向こうとした。サーラが右の肘を放とうとしているのが見える。

ゲイルが左のガードを上げた時、サーラの左足が、ゲイルの剥き出しの股間をしたたかに蹴り上げていた。

「はがっ！」

膝を起点にスナップを利かせた、足甲による鋭い金的蹴りだった。股間を守ろうという本能が、ゲイルの巨躯をくの字に折る。自分の顔の位置に降りてきた兄の両耳を、サーラは両手で掴んだ。それを引き下げながら、膝を思いっきり突き上げる。

サーラは、ゲイルの顎を狙い、膝蹴りを連続で放った。二発ほどはもろに決まったが、ゲイルの大きな両手がサーラの膝を包むようにガードした。

サーラはゲイルの両耳をレバーのように扱い、今度は兄の鼻から目にかけてを三発ほど膝で蹴り上げる。みるみるうちに、サーラの両膝はゲイルの血で真っ赤に染まった。声も無く、ゲイルは強い両腕でサーラを押し放そうとするが、両耳を掴まれているので思うように引き剥がせない。

どすっと、ゲイルの拳がサーラのわき腹に突き刺さった。体勢が悪すぎて、腰の入らないパンチだった。これがあの恐ろしく強い兄のパンチかと思うほどの打撃だったが、あえてこれ以上くらうこともないだろうと、サーラは兄の両耳を放してやった。そして、すかさず飛び膝蹴りを放つ。

ゲイルの血まみれの顔面が打ち上げられる。

その顔は、痛々しいものだった。

両目は塞がる寸前まで腫れ上がり、大きな鼻の骨は粉々になり、複雑に左右に捻じ曲がっていた。鼻からも、口からも、おびただしい出血があり、ゲイルのいかつい顎を覆う髭をべっとりと固めていた。

会場を埋め尽くした観衆は、あまりの出来事に殆ど言葉を失っていた。
大陸最強の男として名を馳せる、ゴール王国の若き新王が、その妹である若干十七歳の少女に、今まで培ってきた格闘家としての鍛錬と勝利の栄光、そしてその逞しい巨体を、完膚なきまでに破壊されようとしていた。
しかし、ゲイルは終わってはいなかった。
自分よりもふた回り小さい妹にここまで傷つめられた今、激しい憤りと羞恥心を感じていたが、それ以上に、どんなことをしても勝たなくてはならなかった。ゲイルは口を大きく開けて空気を求め喘ぎながらも、勇敢にも左右のパンチのコンビネーションを繰り出した。
だが、もはや、それは格闘王の放つパンチとはかけ離れたものだった。
サーラは余裕をもってかわすと、ゲイルの腕の下をくぐらせるようにして渾身の右アッパーを兄の頑丈な顎に叩き込んだ。ゲイルの口が、ばぐんと音をたてて閉じられる。続けざまに、サーラの左の拳がゲイルの顔面にめり込む。ゲイルはそれでも倒れるばかりか、揺るがない。
サーラの右の肘打ちが、ゲイルの顔面を横に凪ぎ、左の肘打ちが顎を打ち上げる。
「ぐぶっ」
血ヘドを吐きながら、ゲイルは顎を太い首に埋める様にして、両腕のガードを上げる。
その途端、またも剥き出しの睾丸を蹴り上げられた。
ゲイルの動きが凍りついたように完全に止まった。

サーラは、兄が致命的なダメージを負っていることにようやく気付いた。だが、容赦は無かった。
右の金的蹴りを下ろしてすぐ、左の金的蹴りを放つ。
足の甲に、兄の睾丸がひしゃげる感覚が伝わる。
ゲイルは、両腕のガードの中で、口をがくんと大きく開けた。血にまみれた唾液が、顎の髭を伝って地面に垂れた。
ゲイルの逞しい両腕が股間を守るよりも早く、三度目の金的蹴りが炸裂した。
サーラは、今度はつま先で蹴り上げた。たまらずに、ゲイルのどっしりとした巨躯が自ら宙に浮いた。
「おごおおっ！！」
ゲイルが、獣の唸り声のようなものをあげた。ゲイルは両手で股間を押さえ前かがみになると、がくりと両膝をついた。
「う…おうっ…うっ」
あまりの激痛に、その口から小刻みに喘ぎ声が洩れる。サーラは、渾身の回し蹴りをその顔面に放った。
ぶしっ！
ゲイルの顔面から、鮮血が噴出し、上体が後ろにのけぞる。

それでも倒れないゲイルの後頭部に、サーラの逆足での回し蹴りがさらに決まる。
「ぐふっ…」
ついに、ゲイルの巨体が前のめりに倒れ込む。
（決まった……！！）
勝利の喜びに、サーラは一瞬気を失いそうになる。
しかし、ゲイルはその巨体にまだ生命力を残していた。顔面から石畳みに激突する寸前、太い両腕がそれを支えた。
サーラは慌てるようにして、ゲイルの背中に馬乗りになった。兄の血にまみれた短い前髪を左手で掴み、後ろに引く。
己の血で殆ど真っ赤になったゲイルの剥き出しの顔面を、右手で何度も殴り付けた。鼻の軟骨は粉々に砕け、殆ど顔面にめり込んでいた。
サーラはゲイルの目を中心に殴り付ける。右目はもはや完全に閉じかけていたので、左目を正面から潰すように殴り続けた。
「ぐぶうぅっ」
耐えかねて、ゲイルがサーラを背中に乗せたまま立ち上がろうとした。すかさず、サーラはゲイルの背中から滑り降りると、満身創痍の兄の尻の向こうで揺れる睾丸を、背後から思いっきり蹴り上げた。

「ぎゃおおおっっ！！」
ゲイルが股間を押さえ、再び両膝をつこうとするのを、悠々と前に回り込んだサーラの天を突くような蹴り上げが阻止した。倒れることも許されず、ゲイルは血まみれの顔面で天を仰いだ。
さらに、サーラは渾身の蹴りをゲイルの喉に叩き込んだ。
「ぐっ」
間髪を入れずに、手刀でゲイルの喉仏をさらに押し込んだ。
「ぐぇっ」
ゲイルの口から蛙が押しつぶされたような悲鳴が飛び出した。股間を覆っていた両手のうち片方が、その太い喉を庇うように掴んだ。
サーラは右手の人差し指と中指とで、殆ど閉じかけたゲイルの両目を突いた。
「ぎゃっ」
ゲイルの注意が頭に行ったところで、サーラは兄の逞しい岩のように硬い上腕を両手で掴むと、突き上げるような膝蹴りを、兄の睾丸に叩き込んだ。
「はおっっ！！」
ゲイルの両腕が再び降りてくるのを、サーラの両肘が防いでいた。ゲイルの剥き出しの睾丸に、サーラはさらに交互に六回、膝蹴りを叩き込んだ。ゲイルの睾丸は、サーラの白い膝と自分の肉体とに挟まれ、殆ど平らにひしゃげ、立派な陰茎はその度に弾むように踊った。

サーラの両肘を押しのけ、ゲイルの両手が自分の急所をしっかりと握り込んだ。
サーラは既に抗戦能力を失った兄が自分にもたれかかってきたので、その腹に何度も膝蹴りを食らわせた。
ゲイルの腹は恐ろしく硬く、頑丈だったが、二十発以上の膝蹴りと十発以上の拳を受けてようやく、ゲイルの口から血が混じった胃液が吐き出された。うつ伏せに倒れ込もうとするゲイルの顎に、サーラの肘が炸裂し、ゲイルはまたも強制的に立たされた。
サーラが跳躍し、ゲイルの牡牛のような太い首に両足を巻き付けた。
一瞬、ゲイルの脳裏に好機が訪れたような感覚があった。
このまま、サーラを肩に担いで、地面に叩き付ければ……。
しかし、あまりにダメージを負いすぎた格闘王の反応は、十七歳の敏捷な少女よりも遥かに鈍かった。
「はっ！」
サーラが振り子の要領で思いっきり身を後方に反らせた。
ゲイルの巨躯が逆さになり、サーラの両足に挟まれた頭が、石の床に激突した。
ぶっ！
脳天を叩き付けられたゲイルの鼻から、再びおびただしい出血があった。サーラは、地響きを伴って仰向けに倒れたゲイルの髪の毛を掴み上げると、強引に立たせ、二度、同じ投げ技を連発

した。
最後の投げは、ゲイルの顔面を闘技場の壁に叩き付ける形になった。石の壁に、ゲイルの顔面の血がこびりついた。
サーラは全身のバネの力を一気に解放すると、その体勢から更にゲイルの脳天を地面に叩きつけた。
闘技場の周囲、壁の手前の床は土が剥き出しになっていたので、ゲイルの脳天は地面に僅かに埋まり、ゲイルは倒立したまま止まったような格好になった。
サーラの胴回りはありそうな両脚が、だらしなく蟹股の状態で開かれ、その中央で、全ての男性が羨む、太くて巨大な陰茎が逞しい腹の方向に垂れ下がり、サーラの小さな頭ほどに腫れ上がった睾丸があまりにも無防備に、まるで少女への生贄でもあるかのように晒されていた。
ゲイルの筋肉に覆われた丸太のような両手は、左右にだらりと地面に垂れており、両目は白目を剥き、空気を求めて喘いでいた口も、今は大きく開かれたまま微動だにしなかった。
大陸中の強者を振るえ上がらせ、最強の男と恐れられた巨漢が、十七歳の少女の前に肉塊と化したその巨躯を無防備にも晒している光景を目の前にし、国民達は静まり返っていた。
サーラは、おもむろに右手を伸ばすと、目の前にある兄の最大の急所を鷲づかみにした。
ゲイルの全身が、びくりと痙攣した。その白目に、瞳が蘇った。
サーラに勝利をもたらした、兄の男のシンボルは、生暖かく柔らかく心地よかった。

それは腫れ上がってもおり、元々が巨大だったのでサーラの右手には収まりきらなかった。仕方なく、サーラは兄の左の睾丸に的を絞り、しっかりと握り込んだ。
「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁ…タ、タマがぁ……」
サーラにしか聞こえない程の、ゲイルの呻き声だった。
「兄さん、どうやら私の勝ちね」
「がはっ、つ、潰れる……」
ゲイルの両足が、虚しく空を蹴る。サーラが右手に更に力を込めると、それは激しい痙攣へと変わっていった。
「あがっ、あがっ、うっ、うっ、うおっ、おっ…」
ゲイルが呻き声しか上げれなくなったようなので、サーラは右手の力を少し弱めた。
「まさか、私が兄さんに勝てるなんてね。でも、金的を何発か蹴り上げてやったら、兄さんも大したことなかったわよ。所詮、大陸最強と謳われた兄さんも、決定的な急所を持つ男に過ぎなかったということね」
「……は、早く、き、決めてくれ……」
ゲイルは男泣きに泣いているようであった。無論、涙腺もいかれてしまい、血は流せても涙は出なかったのだが、喉に詰まったような声がそれを示していた。
サーラは、兄の涙に胸を打たれていた。

だが、兄をここまで無残に負かしてしまった以上、兄にかける容赦はさらに兄を辱めるだけでしかないことを悟り、大きく頷いた。
サーラは、再び右手で兄の睾丸を掴み、思いきり絞り上げた。
「ぐあああああああああああああああっ！！！」
ゲイルの絶叫が、静まり返った闘技場に響き渡る。
二万人の国民は、勇猛なる格闘王の最後を悟った。
「おごっ、おごっ、ほげぇぇぇぇぇぇ！！」
ゲイルの全身の筋肉が痛みに耐えるため硬直し、完成された究極の男性美をその最期に誇示しているようでもあった。
「あがっ、あがああっ！！タ、タ、タマがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！　お、俺の、タ、タマがぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
サーラは、兄が俄かに勃起し出しているのに気付いた。生命の危機が訪れたとき、男は最期に種の保存を試みて勃起するのだと教わったことを、唐突に思い出した。
咄嗟に、サーラの左手が、自分の腕ほどの太さのあるゲイルの陰茎を掴んだ。それを、上下に思いっきりしごく。
「ぐあっ、ぐあっ、ぐあっ、はぐっ」
ゲイルの呻き声が明らかに変化した。断末魔の激痛と快感が凄まじい渦となり、ゲイルの脳を

襲っていた。
「あ、あ、うっ……あぎゃあっっ！！」
ゲイルが絶叫し、サーラの胸に大量に射精した。びくびくと痙攣する陰茎からは勢い良く、そして止めど無く精液が吐き出された。既に、ゲイルは完全に勃起しており、その精子はゲイル自身の顎やサーラの足にこびりついた。
ゲイルの逞しい両足も、蟹股のまま激しく痙攣を繰り返した。激痛を覆い隠した快感も去り、ゲイルは再び地獄に引き戻されていた。
「はぐあああああああああああああああっ！！！」
サーラの右手の中で、ゲイルの睾丸がゴリゴリと音を立てて揉み絞られた。ゲイルの巨体が激痛に悶え、仰向けに壁にもたれかかった。
「ぐあっ、ぐあっ、ほげっっ！！ぐふぅー…」
突然、ゲイルが吐息を洩らし、絶叫するのを止めた。
腹を突き出す格好でえびぞりになり、その太い両腕や厚い胸板までもが、激しい痙攣に襲われ、陰茎も独立した生き物のように激しく脈打ち、鮮血が混じった桃色の精液を噴出した。
悲鳴も無く、ゲイルの両目はぐるりと完全に白目を剥き、口からは血で染まった泡がぶくぶくと地面に垂れ流された。天に向けて聳え立っていた陰茎がみるみるうちに萎れ、ゲイルの腹にだらんと這った。

サーラは尻を壁につけた格好で仰向けに倒れたゲイルの顔面を左足で踏み付けると、おもむろに右腕を高々と掲げ上げた。
おおおおおっっ！！！
それまで水を打ったように静かだった闘技場が、揺れんばかりの歓声に沸き上がった。
「私が勝者だ！！兄、ゲイルは私の前に倒れ伏した！　そして、このサーラこそが、新たなゴールの支配者である」
支配者を決める決闘の後は、必ず勝者が敗者に止めをささなくてはならない。敗者が男であればその睾丸を、女であれば乳房を引き千切り、殺すのだ。
サーラは、まだ痙攣し続けている兄の巨躯を見下ろした。
その顔は血でどす黒く染まり、両目は腫れて殆ど閉じかけており、僅かに見える白目が小刻みに震えていた。鼻は無様にぐしゃぐしゃに潰され、口の周りのや顎鬚には、吐き出された血と胃液とがこびりついていた。
サーラはおもむろに左足をどけると、ゲイルの腫れ上がった睾丸を踏みしめた。びくりと、ゲイルの巨躯が大きく痙攣した。
「ごらんの通り、兄ゲイルにはまだ息がある。その生命力。流石は、大陸最強と謳われた格闘王であると認めざるを得ない。だが、私は素手で、この男を殆ど破壊した。いつでも、止めをさすことが出来る。そして、ゲイルの身体にはまだ一対の睾丸が残されている。潰れてはいない。た

だ、男故に急所の痛みに耐えきれず、無様にも失神したのだ。掟では、私が兄の睾丸を引き千切り、勝利を唱えるのだが…私はそれを取ったりはしない。

なぜなら、ゲイルには、これから私の右腕として働いてもらわねばならないし、兄が再び王権を望んだその時は…この睾丸こそが、私に再びの勝利をもたらしてくれるからだ！！」（完）